

聖書:列王記第二15章13~26節

説教:剣を取る者はみな剣で滅びる

はじめに

列王記第二に書かれていることは、およそ二千八百年前のイスラエルの歴史です。私たちにとっては遠い昔の中東と呼ばれる場所の話です。けれども今まさにイスラエルとパレスチナで起きている戦争は、元をたどれば聖書に書かれているイスラエルの歴史が大きく関わっているのは皆さんもご存じ通りです。極端な話しではなく、ここに書かれている聖書をどう解釈するか、その解釈の仕方によっては戦争が起きることもある。

そんなニュースを見聞きする時代にあつて、聖書を神のことばであると告白する私たちはどうしたらよいのか。皆とまどっておられるのではないのでしょうか。聖書はなんと語ってるのでしょうか。このような時だからこそ、聖書が語っている真理を世の人々に伝えていく。そのような積極的な役割が私たちにあるのではないかと思うのです。

今日開いているところでは、北イスラエルの王がめまぐるしく移り変わっています。今朝はその中の十六代の王メナヘムに注目していきます。彼は何をし、その結果、王国はどうなっていったのか。そこに、私たちが学ぶべきどのような真理があるのか。戦争と混乱の中にあるこの時代にあつて、聖書はどこに解決があると教えているのか。ともに考えてまいります。

1 メナヘム

1) 城門を開かなかったの

14節から16節を読みます。「ガディの子メナヘムは、ティルツァから上つてサマリアに至り、ヤベシュの子シャルムをサマリアで打ち、彼を殺して、彼に代わって王となった。シャルムについてのその他の事柄、彼が企てた謀反は、『イスラエルの王の歴代誌』にまさしく記されている。そのとき、メナヘムはティルツァから出て、ティフサフとその住民、その領地を討った。彼らが城門を開かなかったの、その中のすべての妊婦たちを打ち殺して切り裂いた。」

北イスラエルの首都はこのときサマリアでしたが、国が建てられた当初は、サマリアから十キロほど東にあるティルツァがそうでした。メナヘムはそこで生まれ育ち、いつか王の座を狙おうとじつと計画していたのでしょうか。それでシャルムがイスラエルの王となったと聞いた時、これはチャ

ンスと考え、すぐに兵を集めてサマリアに攻め上ります。けれども真つ直ぐにサマリアには行かず、ティフサフという城壁を巡らした町に向かい、メナヘムは門の前でこう叫びます。「お前たちはどちらにつくのか。シャルムかそれとも私か。もし私につくのならば、今すぐ門を開ける。」どうしてこんなことをするのか。おそらくこんなことだったのでしょう。ティフサフが自分に味方するかわかりません。シャルムにつく可能性があります。それを真つ先に考えた。というのは、軍隊を進める時にもっとも恐ろしいのは、うしろから襲われることです。逃げ場がなくなるから。それでまずティフサフを脅かして味方につけようとした。ところがティフサフは門を開けない。自分たちはシャルム王につくという意思表示です。それで門をこじ開け、町に攻め入つてこういうことをする。「その中のすべての妊婦たちを打ち殺して切り裂いた。」

2) 主の目に悪であることを行つた

読んでいただけで胸が苦しくなるような描写です。こんなことがあつていいのかと思います。メナヘムは人としての感情を持たない残酷な人間だったのでしょか。そうではない。彼だけが特別だったわけではありません。

大宮司須磨子姉の書かれた戦争体験記を皆さんにご紹介します。姉はテニアン島というところで生まれ育ちました。十四歳の時にアメリカ軍が上陸して来るとすぐに民間人は島にある洞窟に逃げ、あとから日本軍の兵士もやって来た。ところがそこには赤ちゃんもいるわけで、食べ物がありませんからお腹が空いて泣き出した。そうすると一人の兵士が母親に向かってこう言ったというのです。「赤ん坊を泣かすな。殺すぞ。」それでどうしたか。そのお母さんは泣きながら赤ちゃんを海に放り投げたというのです。人はいざとなるとこういうことを母親に言って、そうさせる。人間はいざとなればだれでも残酷になるということなのです。

聖書はその事実を真つ直ぐに突きつけてきます。18節に、メナヘムは主の目に悪であることを行つたとあります。それはただ信仰がなかったという意味ではありません。妊婦の腹を切り裂くというような残酷なことは、神の前で、そんなことが絶対にあつてはならないのです。

3) アッシリアに銀を渡す

このようにしてメナヘムはこの世の価値観で見れば権力の座に上り詰め、この世の榮譽を手に入れました。そんなメナヘムにあるとき大きな危機を迎えます。ここでアッシリアが登場してきます。アッシリアは、いまのイラクのチグリス・ユーフラテス川周辺で大きな力を持つようになり、北イスラエルにも勢力を拡大しようとしてきた。19, 20節。「アッシリアの王プルがこの国に来たとき、メナヘムは銀千タラントをプルに与えた。プルの援助によって、王国を強くするためであった。メナヘムは、イスラエルのすべての有力者にそれぞれ銀五十シェケルを供出させ、これをアッシリアの王に与えたので、アッシリアの王は引き返し、この国にとどまらなかった。」

アッシリアは大きな国になるだけあって、非常に賢い戦略をとります。いきなり攻め込んでくるのではなく、まずは穏やかに話し合いをしようを持ちかける。もちろん対等ではなく、言うことを聞かなければどうなるかわかっているだろうな。そういう話し合いです。なんのことはない。かつてメナヘムも、ティルツアの町でやったのと同じ。

それでメナヘムはどうしたか。北イスラエルは小さな国です。軍隊では勝ち目はありません。それならいっそのことアッシリアの味方になって何かあったら助けてもらおうと考えた。もちろん「ただ」という訳にはいかない。それで銀千タラントを贈り物として送った。今なら単純に計算して50億円ですが、物の価値はだいぶ違っていますから当時としては莫大な金額だったはずです。その結果、アッシリアは満足しておとなしく引き返していききました。

2 歴史

1) メナヘムがしたことの評価

さて、問題はメナヘムがしたことをどう評価するかです。アッシリアがおとなしく帰って行った、そこだけ切り取って見れば、メナヘムは政治的に成功したといことになるでしょう。しかしもう少し長い視点で見たらどうなるか。アッシリアがちょっと恐れ顔をしたら、北イスラエルから高価な銀が出てきた。あそこにはたくさんの宝があるにちがいない。アッシリアにそう思わせてしまったのです。それでどうなったか。メナヘムの時から三十年後、ホセヤ王のとき、アッシリアが攻め込んできて、サマリアは陥落し、とうとう北イスラエルは滅亡してしてしまいます。つまりメナヘムにとっては良いと思っただけで、長い目で見れば

実は国の滅びを招く結果となった。まったく反対の評価になってしまいます。

2) 離散するユダヤ人

メナヘムは剣によって権力を手に入れ、アッシリアから剣で圧力をかけられた時にはお金で平和を手に入れます。しかしそれは一時的なものに過ぎず、結局北イスラエルはアッシリアの剣によって滅亡し、人々は補囚の身となってディアスポラ（離散）となっていきます。それが現代の問題にもつながっています。

先ほど大宮司姉の証しの一部をご紹介しました。あの戦争が終わった時、世界は二度と大きな戦いをしてはならないと考え国際連合を設立したと言われます。しかしま国連は有効な手を打つことができず、どうしたらよいのかとみな心を痛めています。

3 イエス・キリストの平和

1) 謙遜とへりくだりによって

ある人は言います。「もし神が本当におられるのなら、どうして戦争を止めないのか。」もったもな疑問です。けれども神は本当に何もしていないのでしょうか。皆さんのお手元に聖書があります。この聖書は、神のことばであると言われています。神は何もしておられないのではなく、むしろ戦いを止めたいと願って、聖書を与えてくださいました。そこにはなにが書いてあるか。なぜ人が人を殺すようになったか。その原因は、人が神を捨てたからだと言われます。多くの人は、そんなことは受け容れがたいと言うのでしょうか。

でももし、戦争が人間の罪によって引き起こされているのだと認めるならどうなるか。実は神は解決方法もちゃんと示してくださっていた。それもことばで語るだけではありません。神ご自身が、ご自分のからだを用いて教えてくださった。それも高い所から「こうしろ、ああしろ」と言ったのではない。神のひとり子である方なのに、謙遜となられ、へりくだり、十字架でみすばらしい姿となられ、教えてくださった。どうしたら戦争を止められるかかとあなたがたは頭を悩ませているけれど、人の知恵で戦争を止めることは絶対にできない。むしろ人間はますます憎み合い、ますます残酷になっていく。

でももし私たちが、イエス・キリストの十字架のもとに来るならば、何を教えられるか。神がどれほどに私たちを愛して下さっているか。神である方が罪によって苦しんでいるこの私たちのためにい

のちを捨てて下さった。そのとき私たちは知らされる。自分がいかに罪深い者であったか。人を愛せない者であったか。人を憎む者であったか。ここに私たちの本当の出発点があります。

2) 剣を捨てたとき

その方は戦争についてなんと語ったでしょう。マタイの福音書26章52節を読みます。「剣をもとに収めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます。」

これはイエスをとらえようとしてやって来た人々に対し、弟子の一人がイエスを守ろうとして剣を抜いて切りかかったとき、イエスが語ったことばです。その結果、イエスは逮捕され、裁判にかけられ、十字架で処刑され、弟子たちは逃げてしまった。それで人々は言うでしょう。剣を使うなど言うのは理想論で、結局イエスは殺され、弟子たちはイエスを見捨てたのだから大失敗ではないか。

ではメナヘムの場合はどうでしょう。メナヘムは剣を使って人として残酷なことを行い権力の座を勝ち取り、一時は成功したかに見えましたが、結局自分も剣によって倒されていきました。イエスが語ったとおりです。

では剣を捨てることでなにか良いことがあったのか。もし剣を捨てなかったなら十字架はありませんでした。イエスが剣を捨てたからこそ、十字架のみわぎが行われ、私たちが罪から救われるという道が備えられたのではないですか。剣を持つ者は必ず滅びる。それは歴史が教えています。そして聖書は教える。剣を取めなさい。そうして、私たちが主の前に罪を悔いるなら、そこに本当の平和が与えられていく。私たちはこの救いのみことばを、争いが絶えないこの世に伝えていきたいと願います。